

A-1

CALL 教室「英語スピーキング&ライティングチャレンジ 2024」概要

○ジョナサン・ハリソン¹, 鈴木孝¹, ジョゼフ・ファラウト¹, 中村文紀¹,
乙黒麻記子¹, 秋庭大悟¹, 丸聡弘¹, 加藤遼子¹, 小西文香¹
*Jonathan Harrison¹, Takashi Suzuki¹, Joseph Falout¹, Fuminori Nakamura¹,
Makiko Otoguro¹, Daigo Akiba¹, Akihiro Maru¹, Ryoko Kato¹, Hisaka Konishi¹

Abstract: The 2024 English Speaking and Writing Challenge was held from Oct. 2024 to Feb. 2025 to support English language learning and provide an opportunity for CST students to evaluate their English proficiency. The program was mostly online but included face-to-face speaking sessions. Nineteen participants completed a total of 21 online tasks and 69 face-to-face speaking sessions for a total of approximately 50 hours of extracurricular education. Fifteen participants partook in a standardized test to evaluate their progress in learning. All TOEIC and 2 IELTS test takers (13 of 15) demonstrated above average performance.

1. はじめに

一般教育 CALL 教室は、理工学部の学生の英語学習を支援するために、2016年以降、学生が無料で使用可能な e-learning 教材、ALC NetAcademy Next をもとにした英単語コンテストを実施してきた。このコンテストに参加した学生が、TOEIC Listening & Reading (LR) において他の学生よりも相対的に高い点数を取る傾向にあることは、以前の学術講演会で指摘してきた通りである。[1] また CALL 教室は、2018年に「リーディングプロジェクト」、2019年に「TOEIC 対策リーディングと語彙」のプロジェクトも実施している。

こうした TOEIC LR の学習支援に加えて、CALL 教室は、TOEIC Speaking & Writing (SW) をはじめとする、スピーキングやライティングの能力を問う試験の対策支援も行ってきた。例えば、2019年に「TOEFL、IELTS、TOEIC SW 対策アカデミックスキル」、2022年に「英語エッセイコンテスト」、2023年に「ランチディスカッション」また「TOEIC SW テストプログラム」を実施している（2021年と2022年は COVID-19 の影響により支援プログラムは中止）。2018年以降は、大学院の英語教育センターのメンバーとも連携し、希望する大学院生向けに TOEIC SW の対策支援及び受験機会を提供してきた。2024年には、これらの学部生・大学院生向けプログラムを「英語 SW チャレンジ」に統合した。本プログラムの目的は、希望者に、標準化テストを視野に入れて、S と W のスキルを向上させる機会を提供することである。本発表では本プログラムの参加者の学習状況と試験結果について議論を行っていく。

2. 実施方法

2024年度の「英語 SW チャレンジ」は、学習期間を

10月から12月までとし、その成果を確認するための TOEIC SW や IELTS の試験は1月と2月に実施された。2024年10月に CST-VOICE および大学の掲示板に、短大生、学部生、大学院生を対象としたポスターを掲示し参加者を募った。このポスターでは、対面または Zoom による1対1のスピーキング練習と個別ライティング指導セッション、また15名の学生への TOEIC SW などの標準化テストの無料受験の機会の提供などが告知された。対面スピーキングセッションを除く、全ての連絡や活動はオンラインで行った。本プログラムは自主学習と指導学習で構成されている。自主学習では、希望者に自習用の教科書を貸与し、指導学習では、Google Classroom にコースを開設した。Classroom には①事前アンケート、②テスト解説(サンプル問題付き)、③19の課題(模範解答付き:スピーキング6課題[読解/発音、Q&A、面接]、語彙1課題[英単語コンテスト]、ライティング12課題[メール作成、Q&A、記述問題、ライティング速度測定、エッセイ作成])、④教員とのスピーキングセッション予約オプション、⑤試験日程情報、⑥最終アンケート、が含まれている。S 課題は2~7分、W 課題は5~40分を解答時間とし、課題のトピックと形式は TOEIC SW、TOEFL、IELTS の試験課題と同内容となるよう設定した。

「スピーキング」、「ライティング」、また「テスト」のそれぞれの活動を完了したアクティブな参加者は大学院生3名、学部生16名の計19名である。

3. 結果と考察

(1) スピーキングとライティングの学習状況

まず学生に自習用の教科書を貸し出した。Classroom 上の S と W 課題について、6名の参加者が合計19課

題（各1～7課題）を完了した。平均で3.2課題を完了させている。6名の参加者は合計10件のスピーキング課題（総時間24分）と9件のライティング課題（総時間260分）を完了させ、フィードバック時間を除いた平均学修時間は4時間44分である。

スピーキングセッションでは、9名の参加者が個人またはグループでのセッションに参加し、合計71セッション（対面69回、Zoom経由2回）が実施された。各セッションは30～60分間で行われた。参加者の総時間数は、最短で30分、最長で8時間40分であり、平均はおよそ5時間だった。対面とZoomを合計すると、44.5時間のスピーキングとリスニング指導が行われたことになる。71セッションの対象試験別頻度は以下の通りである：IELTS（23）、一般会話（19）、TOEIC SW（10）、TOEIC LR（8）、研究論文・発表関連（8）、国連面接（4）、英検（3）、エッセイ作成（2）。

表1. 教育活動

教育活動	タスク数	時間
オンラインS	10	24分
オンラインW	9	4時間20分
Zoomスピーキング	2	1時間
対面スピーキング	69	43時間30分
合計	90	49時間14分

学生の学習時間は、91%がスピーキングに集中し、ライティングは9%にとどまった。今回実施したTOEIC SのスコアがTOEIC Wよりも低かったことから、学生はスピーキングが弱点であることを認識し、そのスキル向上に取り組んでいたことが示唆される。

(2) 試験結果

2024年10月の事前アンケートで、学生に受験希望試験を回答させ、コース終了時、4つの対象試験（TOEIC SW、TOEIC LR、TOEFL、IELTS）のそれぞれの日程または受験期間を提示した。TOEFLに関心があったが試験日に都合がつかなかった参加者もいれば、試験受験自体に関心がなかった学生もいた。

2025年1月28日から2月3日にかけてTOEIC SWオンラインを受験した参加者6名の平均点は0～200点満点中147点であった。これは大学生の全国平均117点および工学専攻の平均125点を上回るスコアである。[2] 同年2月5日にTOEIC LRを受験した5名の参加者の平均点は、0～990点満点中618点であり、大学生の全国平均564点および工学部生の全国平均574点を上回った。[3] 同年1月25日から2月22日にかけてIELTSを受験した参加者は4名で、0～9のスケールにおいて、

受験者の半数が国内平均値である5.8を上回るスコアを獲得した。[4] ただしIELTSは公式に平均スコアを提供していないため非公式の参考値とする。

表2. 試験結果

	Min	Mean	Max	Jpn
TOEIC S (n=6)	110	132	150	
TOEIC W (n=6)	120	162	180	
TOEIC SW (n=6)	135	147	165	117
TOEIC LR (n=5)	595	618	635	564
IELTS (n=4)	5	5.67	6.5	5.8*

*非公式

4. 結論

2024年度の英語SWチャレンジは、過去の支援プログラムの要素を統合し、学生に自主学習、指導学習、および標準化テストによる英語力評価の機会を提供した。本プログラムに積極的に取り組んだ19名の参加者は、合計21のオンライン課題と69回の対面スピーキングセッションを合わせて約50時間（表1）の学習を行った。TOEIC SWとLR、およびIELTS受験者15名中13名全員が平均以上の成績を示し、オンライン・対面学習を合わせた全体の91%がスピーキング学習に集中した（自主学習・PUC利用分を除く）。この数字は、参加者がスピーキング能力向上の必要性を認識していることを示しており、実際、彼らのTOEIC SやIELTSスピーキングのスコアはまだまだ伸長の余地があると考えられる。本プログラムの問題点としては、講師が1名のみであり、実施期間が後学期に限定されること、またスピーキング指導が可能な時間帯が駿河台、船橋の2校舎に分割されることが挙げられ、これらの問題解消が今後の課題である。

5. 参考文献

[1] 加藤遼子, 鈴木孝, ジョセフ・ファラウト, 中村文紀, J. ハリソン, 乙黒麻記子, 秋庭大悟, 丸聡弘「CST単語コンテストの結果とe-learningの学修時間の関連性について」第68回理工学部学術講演会(2024).
 [2] ETS, TOEIC 2024 Report on Test Takers Worldwide: Speaking & Writing Tests. (2025).
 [3] ETS, TOEIC 2024 Report on Test Takers Worldwide: Listening & Reading Tests. (2025).
 [4] Geeks for Geeks. Average IELTS Score 2024: Check Country-wise and Section-wise Score. (2025) <https://www.geeksforgoeks.org/ielts/average-ielts-score/>